

⑤ 依頼製作

受託年月	完成年月	件名	数	依頼者	製作担当者等
13・2	13・3	名古屋汎太平洋平和博覧会記念銅牌	50個	名古屋市長 大岩 勇夫	図案 森田 武 製作 松沼 源吉
13・3	13・3	銀製花盛器	2個	馬政局	石田 英一
13・7	13・10	賞牌	10個	日本学術協会 代表 西成甫	渡辺 顯
13・9	13・10	花盛器	2個	馬政局	石田 英一 渡辺 顯 外箱等 黒川 義勝

⑥ 川合玉堂の辞職・日本画科改革問題

日本画科主任教授川合玉堂は、既述のように帝展改組問題に関連して昭和十一年六月に辞表を提出したが、留任して同十三年四月十四日に至り辞職が許可された。その際、玉堂は日本画科生徒の学芸研究を補助するための奨学金五千円を寄附した。玉堂が辞職した結果、結城素明が同科主任となり、教授結城素明、小泉青堂、助教教授常岡文亀、山田廉、講師矢沢弦月、川崎小虎という指導体制となった。一方の油画科が岡田三郎助、藤島武二、小林万吾、南薫造、田辺至ら教授五名であるのに対して、日本画科はわずか二名となり、また、帝国芸術院会員級の作家は、油画科が岡田三郎助、藤島武二、南薫造の計三名、彫刻科も北村西望、建畠大夢、朝倉文夫の計三名、工芸部が和田三造、香取秀真、清水南山、津田信夫の計四名であるのに対して日本画科は素明ただ一人という状態となった。

日本画科の人事問題は、既述のように松岡映丘の辞職（昭和十年

九月）の頃から大きくクローズアップしていたが、この問題は芝田校長時代へ持ち越された。左記の記事に明らかのように、芝田校長も解決に苦慮したようだ。

日本畫科改革で美校に一騒動？

芝田新校長一大刷新を決意

注目・美術界の推移

文部省圖書局長から東京美術學校長に轉任した芝田徹心氏は就任以來校内の空気を靜觀すると同時に本年度文展一般日本畫部の成績を見た結果現在東京美術學校日本畫科の機構に對し一大改革を行ふ必要を痛感し教授の入替其の他根本的教育方針改更案を樹立すべくその準備に着手したと云ふことであるが、同校日本畫科には從來三つの勢力があつたが過般の美術界騒動から主任教授の川合玉堂氏が辭職しその前に松岡映丘氏も去つて、現在は結城素明畫伯の天下となつてゐるが、これに改革を斷行しやうとなると可なり大きな騒ぎが校内外に起ることを豫想しなければならぬ狀況にあるので芝田校長は慎重な態度で學校騒動を極少範圍内に止めて改革を行ふ良案を考究しつゝあるとの事である、今日の儘で放置すれば今議會で大口大議士あたりから平生文相に對し文展問題、帝院問題と共に鋭い質問をあげせることは明かであるによつて或は美校改革が促進される事になれば芝田校長は存外樂に學校改革を斷行することが出来るのではあるまいかとも見られるが、兎に角美校日本畫科改革によつて一と騒動起る氣配が濃厚に上野

の柱に立籠めてゐる（寫眞は芝田校長〔写真省略〕）

（昭和十一年十一月十五日『東京毎夕新聞』）

しかし、解決に至らず、左記の正木直彦の『十三松堂日記』の記述が示すように、内密の教授候補者選びが行われたりしたものの、進展はなく、結局この問題は昭和十九年の大改革の要因として潜伏することになった。

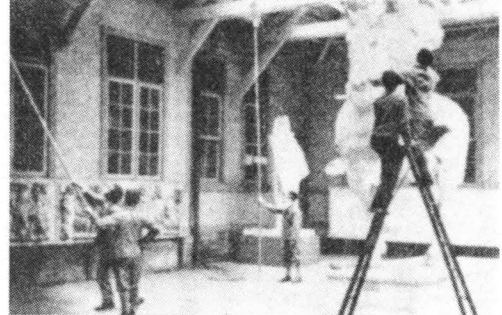
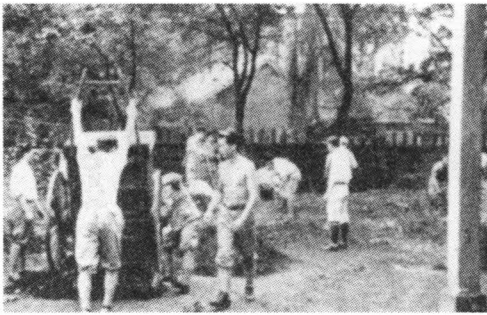
〔昭和十二年〕

六月二十一日……夜矢澤弦月 吉村忠夫兩人來りて藝術院の事學校改革の世評などにつきて罪念に堪へずと學校の近況を話す  
美術學校出身者の琮々たる人々にて東臯會を結成せることの報告を爲したり

九月十日……夜吉村忠夫來訪 美術學校校長芝田氏 鏑木清方氏を  
訪ひ美術學校教育の事に付き意見を徴されたり 而して吉村氏を  
召致して此事を話し吉村氏にして余を助けるならば芝田氏の  
意見に隨ふてもよい 尙安田軼彦氏受諾するならば自分は喜んで  
就職すへしといひたりと内密の話なれと申上置くといへり  
十一月十七日……松岡映丘氏來訪 文展開會後の状態 美術學校  
改革に付き意見を述べられたり

⑦ 集団勤労作業の始まり

昭和十三年六月九日、文部省は「集团的勤労作業運動実施ニ関スル件」の通牒を發し、翌十四日よりその恒久化を進めた。本校でも



結城素明撮影 集団勤労スナップ（『美育』第14卷9号（昭和13年9月）より転載）